

『Walkin'』内海 元伸



常に成果を求めて行動してきた和泉理胡は、ふらふらと暮らしている高校の同級生、河原田篤志に再会する。河原田のつかみどころのなさに不思議と惹かれていく理胡。だが、理胡には3か月会っていない彼女がいて……

『お母さんごっこ』三浦 賢太郎



独身生活を謳歌していたアラフィフ女性、涼美の前に産んだ覚えのない実の息子が現れる。それはアイスも溶けるってことで。ねえ、お母さん？

『駆け抜けたら、海。』十川 雅司



女子大生の綾瀬みつきは、親友の星野うみに片想いをしている。合コンを抜け出してきた2人は閉店間際の銭湯に駆け込む。いつものようにうみの恋愛話を聞かされるみつき。友情と恋愛のはざまでみつきの想いが次第に溢れていく。

ゲスト審査員



1978年東京出身。青山学院大学国際政治経済学部、映画美学校卒。初長編『アルビノの木』(2016)がテアトル新宿ほか公開、『リング・ワンダリング』(2021)が第37回フルシャワ国際映画祭で世界初上映、第52回インド国際映画祭グランプリ。最新作『光る川』が25年3月より全国劇場公開。

『キックボード』畔柳 太陽



彼女をキックボードに乗せて映画を撮りたい彼氏と、乗りたくない彼女について

『恋にセックスは必要ですか?』

志波 景介



佐瀬部莉子は男性から求められると簡単に身体を許してしまう。性に対してだらしない学校生活を送っていると「サセコのサセベ」というあだ名がつけられる。東京の大学に進学したこともあり、今は「サセコのサセベ」と呼ぶ人はいない。しかし今でも適当な男とセックスを繰り返している。そんなある日、他者に性欲を抱かない成田健太郎と出会う。

『ねこの名はたつみ』小山 亮太



とある一家で飼われている猫のたつみ。朝主人公のなぎさ(辻凧子)が目覚ますとたつみがおじさんの姿に。一家は何故かおじさんを猫として受け入れ一緒に住むことになるが…。



1978年長野県出身。ENBUゼミナール卒業後、『スケルツォ』(2008)が、PFFアワードに入選。以降、コンスタントに監督作品を発表する一方で、商業・インディーズ問わずさまざまな監督の現場に助監督として参加。インディーズ映画祭の主催や、舞台演出、ミュージックビデオの製作など、その活動は多岐にわたる。監督代表作として『労働者階級の悪役』(2012)『東京戯曲』(2014)『the believers ビリーバーズ』(2020)など。2022年には監督作『餓鬼が笑う』が、2023年には『サーチライト 一遊星散歩』が全国劇場公開された。また、2024年にはドラマ『ベイビーわるきゅーれ エブリデイ!』に監督として参加。現在、2025年に公開予定の監督最新作の準備中。

『はなとこと』田之上 裕美



港町に暮らす幼なじみの琴と華は、高校三年生。琴はしっかり者の華を姉のように慕い、常に追いかけている。ある日二人は同じ進路を目指す圭一と出会い、やがて三人の距離は縮まっていく。華の圭一への好意に琴が気づいた直後、二人の関係は予期せぬ方向へ向かう。

『ボウルミーツガール』関 駿太



とあるボウリング場。ボウルを投げられない内気な少女・アズミは、親友(自称)のイズミに強引にストライクを約束させられてしまう。窮地に陥ったその時、謎の少年・エイが現れ、アズミからボウルを奪いストライクを決める。衝撃、そして電撃。粉々に打ち砕かれたアズミの中で、確実に何かが変わろうとしていた…。

『もとめたせい』矢部 凜



主人公の相川は、友人の相談を頻繁に受ける女子高生。ある日、ほとんど話した事のないクラスの男子馬場に呼び出され、とある悩みを告白をされてしまう。馬場の悩みを解消するため協力する相川と、その協力に素直に喜ぶ馬場。2人だけの秘密の取引が始まる。



1965年富山県生 国立富山工業高等専門学校(現:富山高専)機械工学科卒業。2011年度 映画美学校ドキュメンタリーコース高等科修了。2019年より任意団体クリエイターズ・ラボ・バックラス代表。同団体の運営する「高円寺シアターバックラス」支配人として様々な上映企画を行う。